『放送教育』一九五四年十二月（日本放送教育協会）

批判ノ二

教育課程に位置づけるためには

矢口　新

学校放送の聴取ということが、教育計画に於て考慮さるべしという提案者の御意見は、一般論としては私も大賛成である。併しそれを具体的に実現させるとなると様々な問題があるように思われる。私は今カリキュラム編成上の立場から少しく卑見を述べて提案者の御教示を得たいと思う。

カリキュラムの編成とは児童生徒の経験の系列を考えて行くことだといわれているが、具体的には児童生徒の活動の仕方がどうでありその対象がどうであるかを決めて行くことだと言えるであろう。それには、何のためにそうするかという目標がはっきりしていなくてはならない。所でラジオを教育の中にとり入れる目標は何であろうか。それは勿論一般的には提案者のいわれる如くラジオ聴収を生活化する教育ということであろうが、もっと具体的に、これらの教材を利用するラジオ学習は、これこれの目的のためであり、これこれのことを聞かせるのはこの目的であるから、こういう場合にこういう態度で、こういう聞き方をさせるということが明確にきめられなければならぬであろう。

もちろんラジオ学習は、ラジオを聞くことを通じて行わるべきものであるが、併しそれはただ聞いて内容を理解するということだけではない問題を含んでいるのではないだろうか。ラジオ聴取を生活化すると提案者が言われる通り、ラジオ学習の中心的意味はラジオを利用する態度にあると言わなくてはならぬ。生活の中にラジオを位置づけることが出来るように人間を教育するのであって、それには、生活の中に於いて様々なあり方をしているラジオの現実を分析し、そこから子供の生活の中に様々な位置づけ方を考え、そういう生活の中に位置づいたラジオを聞くことを通じて、教育がなされるべきであらう。

例えばラジオでニュースを聞いて広い世界の情報にたえず耳をひらいている――それを日々積み重ねて行き、そういうものを生活の展開のエネルギーとして行くということは、我々にとって必要な態度である。こういうラジオ聴収の生活化ということは、学校の教育の中にとり入れられて然るべきものであろうが、それには現在の学校生活の構造の中で、何時どこでラジオのニュースを聞くかということを考えて、学校生活の設計をしなくてはならないであろう。

ニュースを聞くということも、教科の教材を聞くと同じように聞いて覚えておくというような聞き方ではニュースの聴収ということを生活化することは出来ないであろう。

以上のことは一例として述べたにすぎないのであるが、ラジオ教育を行うといっても、このように具体的に考えると、様々な目的があり、それによって、その教材の内容なり、教材の提出の方式なりが考えられるのでないか。

このように考えると、現在の放送教育の内容は、いささか中途半端なきらいがあるように思われる。教材の提出者としての放送局の側にしても、これを利用してカリキュラムを編成する学校の側にしても、明確な目標と、それに基づく具体的な方式が立っていないような気がするのである。

もちろん教材を提出する側でも、その方式を規定する大きな要素である時間の問題に大きい制約があって、極く限られた毎日の時間に行わなければならぬ、そのために、時間にあらゆる種類のものをもりこもうとする所から学校生活の生活構造に、マッチしないことも出来て来るのである。趣味的な内容をもったものは、恐らくラジオを利用して趣味を養う態度を養成するものとして放送されるのであろうが、それが学校生活のそういう趣味を養う時間とマッチしていなければ、カリキュラムに妙なこぶが出来たような存在となって具合がわるいのである。そこで学校でも利用されぬということになるのでないか。

また問題を解決する際のインフォメーションをラジオからとるというような学習にラジオを利用するなら、教材の内容や提出の方式にもそういう工夫がいる筈であろう。ともかく様々な目的にあわせて、内容や方式が具体的に考えられる必要があるのでないか。

一方学校の教育者の側でもラジオを学習に利用するということのねらいと方法をはっきりさせ、現在のようにただ何でも聞いて内容を理解させるのがラジオ学習だという所から一歩抜け出す必要があると思う。或る場合には毎日聞き流して行くという聞かせ方もあろうし、内容を深くつきこんで更に研究するという聞き方もあろうし、休憩時間にたのしみながら聞くということもあろう。それは教材利用のねらいをはっきりさせて具体的にカリキュラムを編成して行くということである。こういう点を考えると、現在学校で考えられているラジオ学習は極めて未分化であるような気がするのであるが、これは私のひがめであろうか。

ともかく、私はこのように考えて、今後のラジオ学習は、もっと具体的なねらいをたて、それに応じて、教材提出の側もそういう意見をどしどし提出して、学校と放送局の側との両者の意見によって、新しい学校放送の企画が樹立されねばならぬと思うのである。

現在行われている学校放送を聴取するという形には、もう限界が来ているのではないだろうか。言いかえれば、ラジオと生活の結合が一歩深まって、その機能が分化して来ているので、その現実に合致したカリキュラムを編成すべき時に来ているのではないかと思う。

（国立教育研究所員）